

徳川美術館 特別展

尾張徳川家の雛まつり

令和2年2月8日(土)～4月5日(日)

主催 徳川美術館 中日新聞社

協力 名古屋市交通局



ゆうそくびな

江戸時代の尾張徳川家の姫君のためにあつらえられた、気品に満ちた有職雛や、婚礼調度のミニチュアである雛道具は、いずれも御三家筆頭の名にふさわしい質の高さを誇ります。また明治から昭和にいたる尾張徳川家3世代の夫人たちの豪華な雛段飾りにも、各時代の技術の粋が結集されています。連綿たる歴史が感じられる尾張徳川家ゆかりの雛人形・雛道具の数々をご堪能ください。

尾張徳川家伝来の雛人形

かねひめ

矩姫の有職雛

矩姫(貞徳院・1831～1902)は福島・二本松にわながとみ丹羽家10代長富の3女として生まれ、嘉永2年(1849)に慶恕(後の尾張徳川家14代慶勝)によしかつお嫁入りました。

矩姫の雛人形は、束帯(そくたい)姿3対・直衣姿(のうし)1対・狩衣姿(かりぎぬ)1対の有職雛(公家の装束を正しく考証して作られた雛人形)で、高さはおよそ30センチあります。当時製作された大名家のお雛様のなかでも、ひときわ格調高い作品です。



有職雛(狩衣姿・束帯姿・五人囃子)



有職雛(御内証)

また矩姫は、小ぶりの雛人形も所持していました。江戸時代末の將軍家や御三家では、雛飾りが大奥の2～3箇所にしつらえられたといわれています。この小ぶりの雛人形の箱には「御内証」の貼札があり、プライベートな場で飾られたと考えられます。

尾張徳川家伝来の雛道具

てっせんからくさまき え

鉄線唐草蒔絵雛道具

徳川美術館に伝えられた最も古い雛道具で、17世紀末から18世紀初頭頃に製作されたと考えられています。本来の所用者は未詳ながら、懸盤(かけばん)と行器(ほかい) (食べ物を入れる器)は、のちに尾張徳川家11代斉温継室福君が所持していました。



鉄線唐草蒔絵雛道具 懸盤

きくおりえだまき え 菊折枝蒔絵雛道具 – 福君の雛道具 –

福君の雛道具の一つで、^{なしじ}梨子地に菊の折枝を配し、所々に近衛家の家紋である抱牡丹紋^{だき ぼ たんもん}と徳川家の葵紋を散りばめたデザインを施し、金具にはすべて銀が用いられています。福君の婚礼調度として伝来する、等身大の菊折枝蒔絵調度の諸道具と遜色のない精巧な出来映えを示しています。

本展覧会では、福君の婚礼調度内の「^{はらいばこ}払箱」（^{くしぼこ}櫛箱）と、雛道具内の「払箱」を並べて展示しています。



菊折枝蒔絵雛道具 払箱

だき ぼ たんもんちらしまき え 抱牡丹紋 散蒔絵雛道具 – 福君の雛道具 –

「菊折枝蒔絵雛道具」とともに、福君が所持した雛道具です。梨子地に^{かながい}金具と蒔絵によって、近衛家の家紋である抱牡丹紋を配し、金銅製の金具を打っています。豪華さと格調の高さに独特の趣きがあります。

しょうちくばいまき え 松竹梅蒔絵雛道具 – 矩姫の雛道具 –



矩姫の雛道具です。梨子地に松竹梅の折枝と唐草文様を配し、銀の金具を打った豪華な仕様です。その数は80点余りにおよび、当時の婚礼調度のありさまをよく伝えています。

松竹梅蒔絵雛道具 三棚飾り

ぼ たんからくさまき え 牡丹唐草蒔絵雛道具

定かではありませんが、もとは11代将軍徳川家斉が愛玩した雛道具で、のちに故あって矩姫の所持するところとなったと伝えられています。

たてわく しょうちくばいまき え 立涌に松竹梅蒔絵雛道具

^{したん}紫檀地に金蒔絵と色漆で、立涌文および松竹梅の丸紋をあらわした洒落たデザインの雛道具です。所用者は明らかではありませんが、重厚感のある一揃えです。

あわせがい 合貝

^{かい あ}貝合わせは^{はまぐり}蛤の貝殻を合わせる遊びです。二枚貝は特定の一片としか合わないため、合貝とそれを納める^{かいおけ}貝桶は、貞節の象徴として婚礼道具の中で最も大切にされました。



菊折枝蒔絵貝桶 合貝

明治時代以降の雛人形・雛道具

尾張徳川家 3 世代にわたる雛段飾り



徳川美術館の創始者である、尾張家 19 代義親^{よしちか}の夫人米子^{よねこ}（1892 ～ 1980）、20 代義知^{よしとも}の夫人正子^{まさこ}（1913 ～ 1998）、そして 21 代義宣^{よしのぶ}の夫人三千子^{みちこ}（1936 ～）の三世代にわたる尾張徳川家の雛段飾りです。数組の内裏雛^{だいりびな}を上段にすえ、三人官女・五人囃子をはじめ、節供の祝儀としてさまざまな方々から贈られた御所人形・毛づくり人形などの人形、さらに多種多様の道具揃えが並べられ、江戸時代以降の大名家の雛段飾りのありかたがよく示されています。

秩父宮妃殿下の内裏雛飾り

秩父宮勢津子妃殿下^{せつこ}（1909 ～ 1995）は、幕末に活躍した会津松平家 9 代容保^{かたもり}の孫で、昭和 3 年（1928）に秩父宮雍仁親王^{やすひと}と結婚しました。勢津子妃殿下が亡くなると、雛飾りは尾張徳川家 20 代義知に嫁いだ妹の正子に贈られました。

男雛の冠^{りゅうえい}は立纓^{りゅうえい}で、装束は天皇にのみ許される黄櫨染^{こうろぜん}の上衣を着用しており、皇室にふさわしい格式のある雛飾りです。

博子さまの内裏雛飾り

尾張徳川家 20 代義知^{よしとも}の次女・高橋博子^{ひろこ}（1938 ～）愛蔵の内裏雛飾りです。雪洞^{ぼんぼり}や懸盤^{かけばん}などの雛道具には、二葉葵の文様があしらわれています。

初公開！

紹子さまの内裏雛飾り

尾張徳川家 21 代義宣と夫人・三千子が長女紹子^{しゅうこ}（1958 ～）のために製作させた内裏雛飾りです。人形の胴を木で作し、衣服の襷^{ひだ}に沿って切れ込みを入れ、裂の端を押し込みながら着せ付ける、木目込み^{きめこ}という技法で作られた愛らしい雛人形です。（令和元年度（2019）田中紹子氏寄贈）



用語解説

黒棚 (くろだな) Kurodana

くろやだな
厨棚 (台所棚) から発生したといわれ、室町時代に厨子棚と共に成立した。主に女性の化粧道具を飾る。厨子棚と同じく四段の棚からなり、二と三の棚の間に観音開きの扉がつく局がある。

厨子棚・黒棚・書棚をあわせて三棚という。室町時代には厨子棚・黒棚の二棚の組合わせであったが、江戸時代初期に書棚が加わり、婚礼調度には三棚を一組として扱うようになった。

厨子棚 (ずしだな) Zushidana

平安時代の公家の調度であった二階棚と二階厨子が変化して、室町時代に成立していたといわれている。手箱・香道具・硯箱などを飾る。上段から一の棚・二の棚・三の棚・四の棚の四段からなり、一の棚は左右の両端が端反りである。二と三、三と四の間の二箇所つほねに局がある。

書棚 (しょだな) Shodana

厨子棚・黒棚が室町時代に形式が定まったのに対して、書棚は江戸時代初期になって婚礼調度に加えられた。飾り付けには特別な決まりがなく、冊子や巻物を飾る。形態や大きさも幾分自由であり、最下段には二本引または四本引の引戸が付く。

挟箱 (はさみばこ) Hasamibako

外出の際に必要な衣類・調度・装身具を納めて従者に担がせる箱である。方形で被蓋造、棒を蓋の上に通して肩に担ぐ。近世の武家独自の旅行用具である。語源は昔、衣服を竹に挟んで運んだためという。大名行列で先頭を挟箱が行く場合は、先箱とも呼ぶ。

伏籠 (ふせご) Fusego

格子状の方形の箱形、または棒を緒でつないで組んだ柵状で、これに衣服をかける。中に香炉を入れ、衣服に香を焚きしめるために用いる。

長持 (ながもち) Nagamochi

衣服・調度などを納める長方形の大型の箱である。吊り金具が両端に付き、棒を通して前後二人で担ぐ。大中小の大きさがあり、数も数個以上揃えられた。

耳盥 (みみだらい) Mimidarai

半球状の盥で、左右に耳状の把手が付く。とって 歯黒染の際に用いられ、はくろぞめ 渡金を耳盥の口縁に渡しその上で鉄漿 (お歯黒の墨) を溶く。わたしがね

広蓋 (ひろぶた) Hirobuta

元来は衣服を入れる箱の蓋の転用であったが、発展して身は作られず衣服用の大型の盆として作られるようになった。また衣服に限らず贈答品や客人へ供する物品なども載せる。

椀・角盥 (はぞう・つのだらい) Hazō and Tsunodarai

角盥は半球状の盥に四本の角状の手が付くところからこの名称がある。二人でこの手をもって運ぶのに便利な構造で、水差しの椀と一対をなす。

行器 (ほかい) Hokai

「ほがい」とも読み、外居とも書く。食物を入れて運ぶ容器である。通常は二個一対で、外反りの四脚が付く、円筒形と四角柱形がある。身と蓋を紐で結び、棒を通して担ぐこともある。

指樽 (さしだる) Sashidaru

酒を入れる箱形の容器である。上部に注口をつける。